第19回労働大学総会議案

Ⅰ、総会の意義と課題

困難を乗り越えて、再建「労働大学」の歩み

労大運動とは大衆学習運動である

１９７９年、労働大学結成２５周年集会に全国から３０００人を結集して、それまでの総括にたって「労大運動とは大衆学習運動である」という方針を確認し合いました。大衆学習運動は、具体的には「学習と相互討論」の積み重ねです。一方で、旧労大指導部は、「労働大学が変質させられた」として、２５周年の総括・基調「学習　反合理化　社会主義」を否定し、自ら変質していきました。階級的視点を失えば、理論は崩壊してゆく、理論なき実践は盲目である、と言われています。この背景には、１９７１年の金ドル交換停止、７３年の変動相場制への移行、国家独占資本主義体制が破綻し新自由主義への歴史的な変化が、労働者運動圧殺への攻撃としてありました。

１９９０年には、理事会体制が発足し、１９９１年に篠藤会長による「基本的指導文書」が発せられ、全協凍結、解散へと組織を破壊しました。１９９３年、中小路理事長と塚元「三池研」代表で「覚書」を交わし、１９９４年1月、労大専従１１名を「戦線移行」で県専従体制が始まりました。１９９６年、さらに、柳本支局長等の解任を強行実施してきました。私たちは、「『全協』再建をめざす労働大学まなぶ友の会県協連絡会議」を発足させ「大衆学習運動」の全国的運動をつくり上げる努力をしてきました。

労大闘争は思想闘争である

１９９９年3月、労動大学労組合結成に対し、同年１１月、理事会は、荒畑、手塚、柳本、３名に対し指名解雇を強行し、東京地裁での裁判闘争に入りました。このたたかいを支えようと「労働大学労働組合支援共闘会議」が発足し、坂牛哲郎代表のもとに全国の心ある仲間が結集し、生活も含めた支援活動が始まりました。

坂牛哲郎代表は、「労大闘争は思想闘争である」と提起しました。―「労働者が学ぶ」ということは、自分の置かれている社会的立場をハッキリ知ることである。そして、社会を支えているのは労働者であることを自覚し、労働者が主人公であるような社会をつくることである。…日本を震撼させた三池闘争のとき、６０年４月から１１月まで、闘争の最重要局面に連日『日刊社会主義』が発刊され、向坂逸郎を中心に『資本論』学習会がもたれた。労大の原点はここにある。―と述べられました。

２００１年9月、私たちは、『まなぶの仲間』を発刊し大衆学習運動の再建への道にしました。その後、情勢の捉え方などの意見の相違が生まれ、東北、中日本。九州ブロックの脱落問題がありましたが、再建の道は着実に前進してきました。

裁判闘争では、組合員解雇は偽装である点を追求し、東京地裁において２００２年１２月１７日、「３名の解雇無効の勝利判決」を勝ち取りました。勝利した３名が今回のたたかいで得たものは、「団結の中に身を置けば生きられる」ということでした。

２００３年5月３日、理事会側は一方的・強引に「労働大学」解散の暴挙に出ました。私たちは、直ちに抗議するとともに、「労働大学再建」への取り組みを始めました。

真の労働大学再建の力に

「労働大学再建集会」が行われたのが、２００３年１１月２４日、坂牛哲郎学長の下に全国から結集しました。その意義と課題として、①科学的社会主義の追及、理論と実践の統一を追求していく。②職場抵抗闘争を軸とした、階級的労働運動の追及、反「連合」の立場に立つ態度を明確にし、闘う労働者と共に歩むこと。③労大再建の主体は、友の会運動・大衆学習運動であり、それと一体となってすすめる。以上３点を意思統一すると共に『月刊まなぶ』発刊を確認し合いました。困難な中でも希望の光が見えたのは、みんなの努力で２００４年１月号『月刊まなぶ』創刊号を誕生させることが出来たことです。

第１回労働大学総会は、２００４年１１月２３日、文京区民センターに全国から結集し困難を乗り越えて、大きな一歩を踏み出しました。そして、坂牛哲郎学長の著書『社会を変える、自分を変える』出版を記念する場となりました。

２０２１年２月、坂牛哲郎学長の死去に伴い、学長の遺志を継ぎ「マルクス主義は額に汗して働く労働者思想」であることを確認しあい、２０２１年１１月２８日、第１８回労働大学総会を成功させ、新しい体制でスタートしました。

労働大学の果たす役割

私たち労働大学の任務は、マルクス・レーニン主義思想をまなび、広めることです。全国の職場と地域に、大衆学習運動、総学習運動を組織することです。

具体的には、全国各地で取り組まれている大衆学習運動としての「労働大学まなぶ友の会運動」の強化・拡大です。資本に対する怒りを組織する『月刊まなぶ』拡大運動です。これらの運動を通して培われた、「相互討論」による人間としての成長、労働者階級としての自覚と誇りです。私たちは、しかりと根を伸ばし、根を張り、粘り強く寄り添い仲間を組織することです。基調「四つの課題を三つに学ぶ」を換言すれば、私たち労働者は、唯物史観と『資本論』に学び、労働者階級の歴史的使命を自覚し、科学的社会主義に不動の確信をもって生き抜く人間になろう、という目標を確認し合い、今日まで努力してきました。『月刊まなぶ』の内容も質的に高められ、多くの仲間の心をとらえています。

目指すは、人間性回復、人間解放

労働者の哲学はまず、労働者が労働者であることに誇りをもつというところから出発します。目指すは人間性回復、人間解放のたたかいであり労働者の世界観を持つことです。

人は、徹底的に考えぬき、全力をあげて努力したとき、どんな困難にも負けない力を身につけることができる、と言われています。その源は、資本に対する怒りです。階級及び階級闘争を自覚することであり、資本主義的常識を打ち破り可能性を高める努力です。

私たちは、これからもゆるぎない確信をもってたたかいぬく決意です。焦ることなく、亀の一歩一歩の前進を仲間と共に着実にはかることです。来年、２０２３年は、労働大学再建２０周年になります。新たな一歩を踏み出すためにも、事務局体制を強化し、大衆学習運動を全国の職場と地域に拡大し、健康を第一にしながら、共に頑張りましょう！